

[学会]

第 11 回千葉糖尿病研究会

日 時：平成 5 年 9 月 18 日 (土)

場 所：ホテルサンガーデン千葉 4 階「天平の間」

会 長：吉田 尚 (千葉大 2 内)

1. インスリン依存型糖尿病 (IDDM) における抗ウシ血清アルブミン (BSA) 抗体の検討

杉原茂孝, 数川瑞子, 今田 進
上瀧邦雄, 小林靖幸, 村田 敦
新美仁男 (千大小児科)
宮本茂樹 (千葉県こども病院)
佐々木望 (埼玉医大・小児科)

インスリン依存型糖尿病 (IDDM) は、自己免疫反応による β 細胞の破壊により発症すると考えられている。近年、Karjalainen らは、フィンランド人 IDDM 患者について血中 BSA 抗体を測定し、全例で陽性となることを示した。さらに、抗 BSA 抗体が膵 β 細胞蛋白に結合することから、牛乳中のアルブミンに対する免疫応答が IDDM 発症の引き金になるという仮説を提唱した。今回我々は、日本人小児 IDDM について検討を試みた。

IDDM 患児の血中抗 BSA 抗体価を ELISA 法により測定した。正常小児において 3 歳以下の乳幼児では 4 歳以上に比し抗 BSA 抗体が明らかに高値だったことより、3 歳以下と 4 歳以上と別々に基準値を設定した。4 歳以上の発症早期 IDDM で、抗 BSA 抗体陽性率は 15 例中 3 例 (20%) と NIDDM, 正常小児等の他群より高い傾向を示すものの有意差はなかった。3 歳以下では、正常小児に比し高値例は認められなかった。

今回の結果は、日本人においては発症に BSA の関与が強くないことを示唆するものといえる。しかし、乳児期のミルク摂取、およびミルク中の BSA に対する免疫応答が IDDM 発症の引き金になるのかどうかは非常に重大な問題であり、今後、抗 BSA 抗体の結合部位 (抗原決定基) も含めさらに検討が必要と思われた。

2. Hypereosinophilic Syndrome と著明な脾石を伴った IDDM とと思われる糖尿病の 1 例

大沼 裕, 藤代 典子, 倉本充彦
鈴木潤子, 八木さやか, 三木隆司
徳山竜彦, 黄 重毅, 佐野裕之
伊藤裕子, 島田 典生, 橋本尚武
金塚 東, 牧野 英一, 吉田 尚
(千大・二内科)

症例、62 歳男性。平成元年糖尿病と指摘され、食事療法にて HbA_{1c} 6.3% と良好にコントロールされていた。平成 5 年、発熱、全身皮疹、口腔粘膜疹の出現を機に糖尿病性ケトアシドーシスに至り当院入院となる。尿中 C ペプチドの低値、グルカゴンテストにて血中 C ペプチドの基礎値低値、無反応を示した。腹部 CT 上著明な脾石を認め、脾外分泌能の軽度低下およびアルギニンテストにてグルカゴンの軽度の低反応を示したが、その突然の発症過程および HLA が DR 4, B10401 と一致したことより IDDM と診断した。発症時より原因不明の eosinophilia が持続し、この原因不明の eosinophilia と IDDM 発症が同時期に出現したことより両者に何らかの因果関係が示唆された。

3. ソマトスタチンアナログ (サンドスタチン®) にて低血糖をコントロールし得た悪性脾島腫瘍の 1 例

渡辺紀彦, 松尾 哲, 岩岡秀明
小方信二, 安 徳純, 柳沢孝夫
松岡祐之 (成田)
金塚 東 (千大・二内科)

症例：80 歳、女性。主訴：意識障害・腹部腫瘤。空腹時血糖 21mg/dl, 意識障害 (JCS II-20) を認め、心窩部に腫瘤を触知。画像所見上脾体尾部に径約 10cm の腫瘤を認め、IRI 高値 (39.8 μ U/ml), 血糖・インスリン比低値 (0.60) であったことから、インスリノーマと考えられた。胃壁・脾浸潤を伴ない手術は困難と考え、ジアゼキサイド 100mg 1 日投与するも無効。酢酸オクレ